

おおさか
KEY
わーど
第21回

いまも新しい「難波宮」

最新研究と人々の交流



前期難波宮朱雀門跡

大阪市は、京都市や奈良市よりも古い都が築かれた都市であった。馬場町・法円坂・大手前四丁目に史跡公園として整備された「難波宮」こそが『日本書紀』にも記された都であったが、悠久の時の経過に埋没して所在が忘れられていた。その発見に情熱をかたむけた“日本のシュリーマン”とも呼ばれる学者がいる。当時、大阪市立大学を退官した山根徳太郎（1889～1973）である。シュリーマンは、ギリシア神話に語られた幻の古代国家トロイを発見した大考古学者だが、「難波宮」も山根教授を中心とする難波宮址顕彰会による発掘調査によって、その全容が明らかにされていった。

「難波宮」には前期と後期の二つがある。大化の改新（645年）で蘇我氏を倒して即位した孝徳天皇は、政争がつづいて混迷した旧来の飛鳥から、港を有して外交・流通の中心である難波へと遷都する。経済力ある国際都市の建設を目指したのである。この新しい都が白雉3（652年）に完成し、前期難波宮と呼ばれている難波長柄豊碕宮である。昭和33（1958年）年に柱穴に焼土が詰まり、火災の痕跡が残る遺構も出土している。後期は、東大寺建立や正倉院で知られる聖武天皇が、平城京、恭仁京、紫香楽宮と遷都を重ねるなかで、神亀3（726年）年に再建に着手し、天平16（744年）年に再び「難波宮」に都を移したもので



発掘現場での山根徳太郎

ある。昭和36（1961年）年に大極殿の跡を発見した山根は、「われ、幻の大極殿を見たり」という印象的な言葉を残し、高度成長期の時代に遺跡を開発から護って史跡公園として保存することにも尽力した。

遺跡を眼下に一望出来る大阪歴史博物館10階の古代展示室には、朱塗りの円柱が建ち並んで、大阪のルーツである「難波宮」の大極殿が原寸大に復元されている。古代の官人の衣装をまとった人形もなれば、タイムトラベルした気分だ。隣室の山根徳太郎を顕彰する胸像が、「難波宮」を見下ろすむきにおかれているのも、発掘に力をそそいだこの考古学者への敬愛の念のあらわれだろう。歴史博物館ではボランティアによる当時の衣装を着る体験コースがあつて、誰でも万葉の大宮人になることができる。また、博物館建設に際して地下に保存した遺構があり、それを見学するツアーもある。

「幻の大極殿を見たり」という言葉から半世紀が過ぎてもなお、「難波宮」研究には新しい発見がある。平成18年、「皮留久佐乃皮斯米之刀斯」と万葉仮名で書かれた木簡が出土した。7世紀中ごろのものとされ、「はるくさのはじめのとし」と読み、万葉仮名で文を成した最古の例として注目されているという。こうした最新の「難波宮」研究についての講演会が、2月25日（土）に大阪市中央公会堂で開催される。難波宮大極殿発見50周年記念「難波宮百花斉放」と題して多くの研究者が、それぞれの専門から「難波宮」研究の今に迫る刺激的な催しである。（19頁参照）

そんなドラマチックな史跡公園とは意識せずに、いつも横を通っていたが、近くでアート系の飲食店を開いている若い知り合いが結婚し、披露宴を「難波宮」の南側の公園の一角を借りて開いた。ずいぶん以前のことになるが、仲間が模擬店を出し、来客は、各自そこで食べ物や飲食物を調達するという宴であった。たくさんの仲間が家族連れで参加し、天気は快晴、風も心地よく、ベルエポックの巴里の公園か、万葉集の時代の野辺の園遊会といった風情である。古代のロマンとともに、こうした営みがこの地に重ねられ、新しい人の交流を生んでいく。国際都市を目指した「難波宮」の記憶が形を変えて、永遠に新しい未来の“大阪”へと伝えられていくのである。（写真提供：大阪市文化財研究所）



皮留久佐木簡(左)と木簡赤外線写真(右)



筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念 木村葦葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念 佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像—』（創元社）など。